

職

歴

ト 二九二キロ第十二ラゲリ

昭和二十四年八月 復員

昭和十七〜五十五年 福井県庁勤務

技術吏員（途中、兵役休職）

昭和五十五年〜平成十年

福井県立短期大学 非常勤講師

仁愛女子短期大学

福井赤十字看護学院

福井市医師会看護学院

福井歯科専門学校

天谷調理師専門学校

平成十年〜平成十七年 天谷調理師専門

門学校専任講師兼栄養研究室長

現在、福井遺族会のボランティアとして

「シベリア抑留語り部」を担当

（福井県 佐々木 清佐夫）

はるかなる シベリア

愛知県 水野 治一

愛知県一宮市千秋町佐野において、自作農家、兄弟十人の六男として生まれた。（現在男一人女二人生存中、他は戦病死で故人）昭和十二（一九三七）年三月二十四日千秋尋常高等小学校高等科卒業。昭和十四年六月一日愛知県丹波郡農会就職、傍ら夜間青年学校に通学中の昭和十八年八月三日、赤紙召集により名古屋八部隊野砲高射砲隊へ。八月十日満州第二六三四部隊（兵器廠）に入隊、三カ月の初年兵教育を受ける。初年兵教育修了後、本部付経理班に配属、夜間は隔日部隊本部にて電話交換事務に従事、昼間は民間人の独身女性二人と交代勤務であった。

昭和二十年八月七日夜、交換業務に従事中、突然昼間勤務の交換嬢の一人が電話交換室に走り込み「兵隊さん、先ほどラジオのニュース放送で明

日ソ連が宣戦を布告して、一気に戦車隊がこの満州領に侵入すると放送されたので、私達はこれからトラックで後方に逃げるが、一緒に逃げないか。」と早口で言ったが、私達は、いかなる事態でも個人行動は許されない。軍の命令を待つて行動するからと言うと、何となく残念、名残り惜しげにして……ではとは別れを告げ帰った。

八月九日、早朝、山口為一郎部隊長から中隊長を通じ戦況報告を受けた時点では、既に敵機は突撃、戦車隊は進攻、我が部隊は兵器廠と言っても名ばかりで兵器は南方、中国に搬出して皆無状態で抵抗武器もなく、襲撃を受けるたびに防空壕に避難して難を逃れた。

ソ連軍の一方的な攻撃に絶え兼ね、最後の手段として、当兵器廠倉庫に在庫として残された火薬を引用して、木箱に火薬を詰め、過去、肉弾三勇士の戦果を思い、早速一人一個の木箱造り。中に火薬を入れ、火薬箱を背負って襲来する敵戦車の進路に待ち伏せ体当りを計画され、これに対し特

別攻撃隊を編成されたところ、希望者は殺到、全員が希望。当時のこと、大和魂の日本人は我れ先に「お国のために死は覚悟の上」と希望し、その順位を年齢の若い者からと決め、第一選抜五十人の名前が発表、第一陣は明朝より実施するので官給品天皇陛下からの貸与衣服類は中隊事務室に返還せよとの命令。出動服装は全裸、裸で日の丸手拭いを頭に巻き、一人一個の火薬箱を背負って呼集があるまで各中隊で待機せよ、と通達があった。

間もなく全員営庭に集合の呼集。山口部隊長の訓示「特別攻撃隊員の任務は、ソ連軍戦車隊が東安、密山付近に侵入、それを阻止するため一人一台の戦車に体当り破壊してほしい。もちろん殉死を覚悟で立派に任務を果されることを望む。」と挨拶した。

五十人は二台のトラックに分乗、出発に先駆け、代表がトラック上から「我々五十人が先に靖国神社に行く、君達の来る日を待っている。頑張れ同志諸君」と言い、最後に全員で天皇陛下万歳を三

唱し、トラックは大きな警笛を鳴らして出発した。

二日目三日目も同様、勇ましく出陣していった。四日目はいよいよ私の出陣、前夜は防空壕でいろいろ脳裏を駆け巡り、眠れなかったので夜中外に出て周囲を見回すと、敵の照明弾によって敵陣が近くに見え、その周辺を戦車、トラックで円陣をつくり、軍用犬、歩哨兵が警戒している風景が手に取る様に見えた。

我が軍、大和魂の大日本帝国関東軍は、命は惜しまないと言っても、無防備、無力で気力のみ戦争は現時点では不可能と自ずから知らしめられた。

一睡もせず朝を迎え、今日の特攻隊員名簿が発表された。この日程、胸をときめかして発表を待った。朝食を済ませ官給品など事務室に返納し、出陣準備、無心で出陣命令を待つ気持ちは言葉に表せられない。

待機時間は刻々と過ぎるも、敵の戦車空爆の銃弾が頭上を雨のごとく、ヒュー、ヒューと飛び交

う。しばらくすると、命令が「全員、後方の横道河子（牡丹江）に後退せよ。」と変った。一転状況変化に戸惑い。一旦返納した官給品を取り戻し、着替え、当面必要な食糧（乾パン一袋、水）手榴弾（自決用）を雑嚢袋に入れ、実弾が飛び交う地上に飛び出した。防空壕の中と違って地上では、敵軍のT35重戦車が接近、砲弾、銃弾の集中的攻撃を受け、一刻の猶予もない。道路は危険で湿地帯に逃走した。

途中、我が特攻隊員が、裸で多くの死傷者を横目に眺め、中には軽傷者は助けを呼び掛けるも危機事態で手の施しようもない。ただ敵軍より離れるため、正に無我夢中で逃亡、湿地帯の逃走は膝までの泥水、ついに命綱の水筒の水まで捨てたが、長行軍で喉が渴き、水分にと湿地帯のポーフラ（蚊の幼虫）混じりの泥水を飲む、時には青草を噛み、青汁で喉を潤すこと度々続く。

夜になると、敵軍は休息に入り襲撃もなく、完全休息のうちに、道路に出て後退、昼夜睡眠を取

らず必死で集結地を目指した。僅かな食糧（乾パン）も絶え、口にする物は湿地の泥水、青草、時には蛙、幼虫までも口に入れ、その空腹をしのぐ有様が続く。無情。

麦河駐屯地を飛び出して、一刻も生きた心地がなく、空腹で体全身汗と泥にまみれ、心身共疲れ切って、やっと八月十四日の夕方、目的地横道河子に着いた。

当地では敵の襲撃もなく平穏であった。当地には日本軍、軍属以外にソ連兵ふうの軍人で警備体勢が取られていることに不思議に感じた。当集結地には既に八百人余の日本人が集結していた。早速到着したことを本部に報告して夕食にありつく。夜は野宿で一夜を明かした。

翌朝、久しぶりに起床命令によって起床したが、同士は誰も疲れ切って会話すら出来ない状態に疲れていた。本当に大変な戦争に巡り合い、戦争は世界平和のために、人類のためにも絶滅しなければならぬ。

営門、営庭には多くのソ連兵ふうの兵士がいて気味が悪く、我が物顔で我々に指示していた。

翌日、昭和二十年八月十五日、朝の点呼において、部隊副官石井大尉の朝礼に続いて、「ただいまより天皇陛下の御言葉をラジオにて放送される。謹んで拝聴せよ。」と達しがあった。放送前に「一同不動の姿勢」の命令、しばらくすると雑音ばかりのラジオ放送が流れたが雑音ばかりで、何の放送かさっぱり聴取できなく、後で石井大尉が恐れ多くも補足説明。「一同厳肅、ただいまの放送は全日本国民に天皇陛下御自ら戦争は一斉終結した。降伏したのではなく合意停戦が結ばれた詔書」である。

「ただいまより武装解除を行う。今後の行動については、ソ連軍の指示に従う」と注釈を加えた。

#### 武装解除

武装解除と言っても、最初から無武装、逃避自決用に隠し持っていた手榴弾、小刀程度、これらも、後退時湿地帯で身を軽くし皆捨て、所持は皆

無であった。ソ連兵は武装解除に関係なく、私物の貴重品欲しさであった。公の武装解除であれば、全員の前でとうとうと検査没収すべきに思うが、一人一人裏山に呼び出し、銃剣を胸元に突き付け、手話で貴金属品（腕時計、メガネ、万年筆、現金など）を出せと言う。ソ連兵達は誰一人ともこれらを所持していない貧窮な国民と思考した。

私は最初に千人針、現金、手帳を出すと、手招きで腕時計を出せときかない。私は事前に聞いていたので絶対腕時計はと思い、隠し持っていた。

私の腕時計は、出征のとき母が入手困難ななか、無理に無理して、闇の闇で入手してくれた唯一の形見で絶対手離さない覚悟であったが、最後に銃口を胸に当て、出さなければ殺すと言われ、やむを得ず命と引き替えることは許せず、肌身に持っていたが出したところ、やっと解放してくれた。

戦勝国の兵隊が敗戦国の我々が持参している物に目をくらす惨めさに侮辱せざるを得ないほどの貧困さに驚いた。ソ連国は、先のドイツ戦に戦

勝、続いて我が国と交戦もなく戦勝した国民の貧困な生活は想像以上である。戦争は、いつの世においても勝者敗者いずれにおいても終結は、国民泣かせの大事業で、国益なく国害で平和を阻害すると深く痛感させられる。

終戦後の八月十六日以降、ソ連国の支配により、食糧は日本軍の糧秣庫に保管されている軍馬の飼料（高粱）を朝・夕の主食に支給、昼食は黒パン一切れ、日本人の常食は米飯食、生鮮食などを要求するがすべて無視。

戦後、食糧が極端に悪く、生鮮食に飢えて思案協議の結果、軍隊の愛馬に目を付け、屠殺を計画、早速営庭の立木に、愛馬を縛り屠殺、昨日まで愛馬として飼っていた。無情にも殴り殺す悲壮さは余りにも身勝手な行為、久しぶりに生鮮食にありつく。

#### 移動命令

昭和二十年九月十日、朝出発前に二百人編成に生まれ、人員点検に我が国の編成で四列縦隊に並

んでソ連兵が数えたが何度数えても合わない。最後に怒って、一列か二列に並べさせたが納得しないので、日本側で数え出発した。ソ連人は兵、将校共、数学の弱さにはあきれ驚いた。

この日は朝からあいにく雨で、雨具もなく徒歩で行く先も分らず出発と聞き、早速付近にあるセメント空袋、ゴザ、筵など拾い集め、雨具として当座の間に合わせにした。

旧満州鉄道沿いに北へ北へと行軍する。道中には元日本軍特別攻撃隊員ふうの裸死傷兵で、生存している同士達で軽傷者は「頼む、助けてくれ。」と必死で頼むが、ソ連兵は無情にその場で銃殺する。道路の両側に裸兵士が折り重なり倒れている姿を横目にして行軍を続ける気持ちはいつまでも忘れられない。

連日降り続く雨期に雨具なしの行軍、夜は鉄道沿いにて睡眠は取れず。昼間の行軍時に歩きながら眠り、眠りながら歩く姿は、元関東軍日本兵とは思えずみすぼらしく悲痛を感じた。これが、数

日前までは大日本帝国関東軍の兵として、何一つ不自由なく過ごしたが、一変して奴隷化、絶えず空腹をしのぐ日々。便所に行くも紙はなく、喉が渴いても飲料水はなく、雨が降り続くも雨具はなく、濡れネズミ同様で無情極まりない。

横道河子駐屯地を出発して、早くも十一日間、睡眠不足で歩き続け、心身共疲れ、衣服は泥汗にまみれ、哀れな姿は正に奴隷の集団移動である。敗戦の悲しさを痛感した。

やっとソ連領土に入る。雨で濡れ、一段と寒さを感じた。心身共疲れてたどり着いた所は小山の麓、周囲は広々とした雑木林と草原地帯。興凱湖の奥でシマノフスク地区。当地はハバロフスクに属する第五五労働大隊本部として隊長に我が軍隊の副官石井大尉として当分滞在すると発表があった。

当地に滞在施設もなく、早速収容所建設に取り掛かる。

小山の麓に十個の穴掘り、運ばれていた丸太で

屋根、その上に瓦の代りに乾燥草。電気、水道の施設はなく、夕刻までに洞窟十個を造り、最後に収容所周りに有刺鉄線を張り、炊事場設置と夜遅くまでに形ばかりの馬賊ふうの宿舎（二十四平方メートル）を十棟。中の寝具は乾燥草、ソ連の寒地に暖房施設等もなく悲劇。

夜は入浴もなく、濡れた衣類で就寝するも疲れによって熟睡、朝起床して洗顔する水もなく朝食。ソ連では、冬期地下十メートルぐらいまで凍結するから水道配管はなく、集落（部落）に一カ所の掘り井戸で住民の生活に間に合わせる生活をしているため、水は重要な貴重品であることから我々の洗濯、入浴にまで事欠く。

長行軍で衰弱した我々を見て、ソ連軍医の健康診断が行われた。我々の不潔さに驚き早速一日全員休暇を与え、頭髮刈り、髭剃り、洗濯、入浴など実施させ清潔に。入浴後、浴槽（ドラム缶）にて衣服の熱湯消毒等々指示をした。

二百人編成で出発したが、当地に着いた者百七

十人、途中落伍、逃亡で減少していた。

水は毎日馬車に二本のドラム缶で運ぶが炊事場湯茶だけで終る。これ以上入浴となると大変な行事であったが、軍医の命令で水運び人員を増員して指示を実行したが、衣類の熱湯消毒には着替えもなく、寒い季節のこと洞窟で体を震わせ待った。女性軍医は、我々の中に虱が蔓延していることを知っての熱湯消毒を指示したが、頑固な虱は簡単には撲滅できなかった。

#### 草刈作業

数日後、作業出動指示が出た。作業には練兵休（重病人）、炊事班を除く全員が駆り出され、鎌の刃渡り七十センチ、木柄一・五メートルに付けた重い鎌を全身で振り回す。広い草原に一列横隊に一齐に刈り進む。鎌は現地人向けに造られ大きく、ソ連人のノルマを強制された。

日本人はソ連人とは体力的にも違うが、これを承知してのノルマを要求する。

数日続けたが、ノルマは依然と上らず現場監督

は怒り、ついにノルマを掲げるためにと、朝は朝星、夜は夜星と次第に要求を厳しくしたが一向効果が出ない。むしろ逆に落伍者、病人が増えた。

#### 冬被服等支給

ソ連の十一月は満州国より一段と寒さが厳しい、寒さも氷点下三〇〜四〇度の気温になると手足先、鼻、耳など痛くなって凍傷になる。

これを放置するとその部分が腐り欠ける恐れがあり、油断は禁物である。その時期によくやく毛布一枚、防寒帽、防寒手袋（綿入れ）、防寒靴、下着など、日本関東軍の押収品が支給された。

十一月十五日の夜、寒さに震えながら乾燥草に潜り、隣で寝ていた名古屋出身の横地秀夫氏といつもの郷土話を語り合っていたところ、いつの間にか話題が途切れた。

翌朝起床合図にも横地氏は起きないので、声を掛けたが無言。不審に思い触れると、すでに冷たくなっていた。

早速日本軍医に依頼した。検診の結果、栄養失

調死と診断された。早速裏山に運び埋葬した。

復員後、名古屋市役所に何度か尋ね、やっと横地氏の家族（妻、子供）に面接、当時の状況を話し、遺留品（横地氏の名前入）の水筒を手渡した。

#### 抑留者の食生活

抑留者の衣食住は、人間生活でも想像以下、奴隷並の最低を強いられ、食生活は一番採めるとあって大変である。朝六時の起床と同時に食事当番を除く全員朝礼に出席、その間に食事当番二、三人は班員全員の朝食昼食を炊事場にて受領、班に持ち帰り朝食（高粱食）、昼食（パン）の分配をする。その結果、いつも多い少ない、大きい小さいでもめること度々、ついにこれの正確を期するため、手製の秤（天秤棒）を造り、文句のないよう等分していた。

炊事場から一括受領する絶対量が少ない。これを個人に分けると、高粱食は飯盒の蓋に一杯弱、昼食黒パン一切れ、栄養もカロリーも無視の食事、作業はソ連人向けのノルマを要求されるので、



絶えず空腹で食に飢える。

冬期も深まり草原も枯草で草刈作業も少なくなり、農作物の収穫期でコルホーズ作業として馬鈴薯掘りに駆り出された。

収集と一連の作業はトラクターで掘り起こし、トラックにて糧秣庫に運ぶ雑作業。作業前にロシア軍将校（現場責任者）より、馬鈴薯は我が国の重要な主食であり貴重である。無断で持ち帰らないようにと厳重に注意があった。しかし隠して持ち帰った場合はチグマ（営倉、牢屋）に数日間入所となった。

作業終了後、一斉に服装検査が行われたが誰も該当者はいなかった。服装検査で時間も遅れ、周囲は真っ暗で、普段であれば日常必需品の紙類（タバコの巻紙、トイレ用）、ソーセージの空缶（改造して食器などに）、鉄屑（小刀、スプーン、剃刀に改造）など道中物色して歩くが暗くて見当たらない。……無言で歩いているうちに、誰となく、馬鈴薯が落ちていけると言う。ふと下を見ると、馬

鈴薯ほどの丸い物が点々と目に入る。我れ先にと昼間の作業を思い、拾ってポケットにいつぱい入れた。

ラーゲリ（収容所）に着いて、早速今夜の食事にとポケットに手を入れると不気味な手触り、取り出してみると馬鈴薯の馬糞の臭気に驚き、同士に話し共に苦笑……。

いかに食物に飢えての行動かと恥辱を感じた。当時は何の欲望もなく、ただ空腹をしのぎたい一念のあまりのことであった。

#### ノルマ作業

レーニン憲法に「働かざる者は食うべからず。」の一句により、国民一人一人の労働基準が定められておるが、その仕事に対する改善改良研究等の意欲心は考えず、定められただけ働けばその日は終る。考え方は大陸ソ連方式で長所短所がある。

#### 虱の退治

当地の水は貴重品である。集落に一カ所の掘り井戸も冬期には水位が下がり、地下七、八メートル

ルの深さに釣瓶でくみ上げるが、当収容所では夏期、馬車で一日三往復が冬期は二往復になり、最小限の水は、炊事用、医務室用に使う程度で、我々百七十人の洗顔、洗濯、入浴までには水量がなく、ついに朝・夕の洗面まで使用禁止され、日増しに不潔が広がり、就寝後、体全体を何か駆け巡る。睡眠不足が続く。誰となく、若しか蚤か虱でも湧いたのではと言うが、ラーゲリ内は洞窟で電気もなく暗くて見る訳にもいかない。

水不足で入浴、洗濯もできず、終戦後着替えもせず、洞窟は万年乾燥草の床と環境は悪い。一日も早く退治しないと睡眠不足、栄養失調となると日本軍医を通じソ連軍医に申し入れた。

数日後、ソ連軍医の指示によって、次の日曜は一齐に作業を中止、全員入浴と、その場で浴槽(ドラム缶)で衣類の熱湯消毒を実施させられた。

続いて、二週、三週にわたって熱湯消毒を繰り返されると共に発生源である洞窟の乾燥草を全部入れ替えるなど撲滅に努めたが、虱は簡単には皆

無に至らなかった。

ソ連側に要望提出

入ソ以来、作業、日常において、常々ロシア語の会話が分からず、誤解を招くことが多く不便を感じていることから次のこと要望。

- 一 会話のできる通訳を配属してほしい
- 二 日ソ戦は一週間の一方的戦争に対し、我々をいつまで抑留するか
- 三 我々日本人の主食は米飯食である。米食に

切替えてほしい

要望に対し回答

- 一 通訳について、数日後、日本人通訳(特務機関)を配属した

- 二 我がナホトカ港は、冬期には全面凍結して、船の出入港ができない

- 三 我が国においては、ドイツ戦以来物資の不足が続き、生活必需品全部を配給制で国民は辛抱している

数日後、炊事班において、一月分の糧秣を受領

したところ、正月元旦に一食分一人二〇〇グラムの白米（日本押収品）茶碗に一杯ぐらいと白砂糖一人大きじ一杯の特配を受領した。

炊事班は普段、ドラム缶で高粱食を炊く習慣で、米飯食は不馴れだが失敗は許されないことからかなり苦勞して研究を重ねたと言う。

正月の食事当番も増員して、配分には慎重に時間を要した。一年半ぶりの米飯とあつて誰もが手が付けられない。中には飯盒に移し、水を入れ再度炊き量を増やし、十分米食を味わう者等々、それぞれ米飯食を多様な方法で味わったのだ。

正月三が日は連休で、身の回りに専念、同時に虱駆除撲滅に努めた。

#### 長期連兵休

私は、コルホーズ作業に駆り出され、心身共に疲れ、体調の不調を感じ、日本の川村軍医に診断を受けたところ、体温が三九度の高熱で下痢が伴い、風邪と診断され、取りあえずアスピリン（解熱）剤三粒を飲み、下痢には薬がなく、下痢止め

に炊事場で木炭を飯盒にいっぱいもらつて、水と一緒に飲んで早速洞窟の乾燥草に潜り込んだ。

翌日再診を受けたところ、軍医はこれ以上適薬はない、当分連兵休で作業を休み様子をみることにした。

一カ月近く連兵休が続き、食欲も次第に無くなり、衰弱も日増しにひどくなり、月一回のソ連軍医の健康診断に相談したところ、軍医はビタミン不足が原因だから、できる限り生鮮食品を多く取るようにと言われたが、現状では特別に生鮮食品の補給は困難で思案したところ、ビタミン補給には草木の新芽に思い付き、翌日から特別申し出て、連兵休ではあつたが、炊事の薪取りを志望した。時は四月下旬のこと、薪取りに裏山では草木も発芽の時期、早速翌日から始めた。寒いソ連でも四月下旬ともなれば丁度発芽のときで、先ず薪取りより先に立木の新芽を採取、長い冬期が過ぎ、新春の空気の新鮮さの中、新芽を摘み早速十分口に入れビタミンの補給に専念。後でポケットに摘み

取った。其の後目的の薪取り、裏山はもちろん国有地で無管理地帯で枯木は無造作で採取は簡単であった。

毎日薪取りを志望し、新芽でビタミン補給に努めたところ、日増しに体調が回復したことを軍医に話し新芽の特効薬を宣伝した。

五月中旬、長い連兵休の解除を申し出て数日後から作業に出た。

#### 現地人の教養、性格

ソ連国は、マルクス・レーニン主義革命により、これを承継してスターリン元帥が共産主義社会を創設実施。国土、生産基盤にすべて国有国营で私有地はなく、国营で生産手段を社会的共有とすることによって、一部の搾取もなく平等な社会の実現を目指していた。国策によって国民の教育まで制限され、自由に進学は認められず、学校の推薦または親の地位によって進学コースが与えられる。その学費は国費によって賄う。

#### 二度目の冬期

昭和二十一年九月、現地人は衣替え、我々にも防寒衣類が支給された。毎日粉雪が舞う中で草刈作業、気候の変化により風邪が流行感染、連兵休患者が続出、ソ連軍医の診断の結果、私も二度目の連兵休となったが、九月では草木の新芽はなくアスピリンの服用で胃を痛め、足がむくみ、ソ連軍医にビタミン剤の注射を依頼して当分休息した。

#### ハロリー地区へ

昭和二十二年三月下旬、突然ソ連軍将校が日本語混じりで「日本に帰るので今夕出発までにこの施設を撤去して出発の準備をするように。」と言った。度々のダモイ発言には信じられなくも指示通り行った。

一昨年当地に來た時百七十人が、その後死亡入院等により百四十人に減少していた。

夕刻トラック四台に分乗して出発した。車上では寒さに堪え、日本に帰れると信じ、寒さも感じないいつときをしのいだ。

トラックは二時間半ほど走行して、停止し下車

した。周囲は民間風の建物が点在する集落の一角に、四方有刺鉄線を張り巡らした中にバラックふうの木造トタン葺き小屋、一見ラーゲリに見えた。

下車して室内に入ると、正に三段式バッテリーふうの寝台になっていた。前のシマノフスカ収容所にはなかつた電灯が二、三個、蛍の光ほどの薄明かりの部屋で、前の洞窟よりは良く、四台のトラックの内二台は下車せず、他に出発した。我々二台七十人は当分第五五労働大隊分遣班として滞在することになった。

当ハロリー収容所は建造物で電気、便所、浴場、炊事場の施設があり、過去ドイツ人か日本人の捕虜収容所として使用されていた。

シマノフスカ収容所とは環境は大きく変ったが、変らない食糧は依然として高粱食、水不足は続いた。

夕食後、ソ連将校が「皆さんを早く日本に帰すため、ナホトカ港に向う途中であるが、ソ連政府が強く日本政府に帰還船を要求しているので、そ

の間当地に待機してほしい。」

いつも分かり切った嘘を平然と言う。

当ハロリーに来て、ソ連軍医の健康診断後、「皆さんが悩んでいる虱退治のため、明日朝から全員入浴し、その浴槽（ドラム缶）で衣類等熱湯消毒、洗濯を一齐に実施して撲滅してほしい。」と言った。ソ連の四月は寒さが厳しく、着替えもないが、幸い当地には室内暖房用ペチカ施設があり、朝から焚き暖房して、今度こそ退治を誓う。

一日の休息中に、ソ連の建築関係者が来て、日本語混じりで建築の職業別に分類（大工職、左官職、煉瓦職、雑役等）に仕分けた。

私は全く建築技術は無知であり、思索していたとき、同士（私の後輩）で、内地では左官、煉瓦の本職、名古屋市出身の酒井氏が「左官、煉瓦職を志願せよ。僕が仕事の面倒を見るから」と言ったので、全くの素人であるが自信なく申し出た。作業現場は、収容所から約二百メートルのところで、煉瓦積二階建ての作業が中断されていた。

聞けば、最近まで日本人抑留者の作業所であった。用途は学校校舎である。

現場には私と同様、素人煉瓦工、五人が志望していた。坂井氏に作業を教わった。現場責任者は、我々五人を素人と見抜き、「お前達は偽煉瓦工だ」と最初から躍起になって怒る。煉瓦積にもノルマが課せられていた。

「ノルマが終るまでラーゲリに帰さない、食事も半減だ」などと言うが、今さら素人は素人、そのはず一度も煉瓦、鋤こに手を触れたことがない始末のこと。

ソ連の煉瓦構造の二階建てには、鉄筋、鉄骨、セメントは一切使わず、モルタルは砂と消石灰を混ぜ、煉瓦を積み上げる。冬の屋外では、直ぐモルタルが凍結することから素早くしないと直ぐ凍り付く、厄介な作業でノルマは上らないことで一苦労した。

マルクス・レーニン主義講座

夜の点呼後、シマノフスク収容所と違って電灯、

暖房設備があり、帰国に備えて、ソ連側の要請により、「軍国主義、搾取の国日本を変える」と題して、社会主義マルクス・レーニン主義、ソ連の制度を学び、帰国して誰もが指導者として活躍するためにと始めた。

最初にそのリーダーとなるアクチーフが日本人通訳の解説から始め、共産主義と馴染めないマルクス・レーニン主義の教育根幹、国民の反応等の解説、共産主義の長所等々、現状について説明。

講義に先立ち、通訳から講義の前にまず「ラーゲリに軍国主義の軍隊において、我々を搾取していた、下士官、将校が共に勉強会を行うこと。不本意、勉強会を有意義に進めるために、過去軍隊にて下士官、将校の職歴のある者を追放すること」を提案可決、該当者一人ずつ前に出し吊るし上げを行った。

吊るし上げは、全員集会の前に出し、各人から過去においての行為を個人的批判、一批判ごとに衣類を一点ずつ脱がす。全裸になると一批判ごと

に逆立ち一回、いかなる批判でも釈明言い訳は許されない。非民主的行為。その夜吊るし上げを受けた者は、数日間使役服務後、他に追放。……数日後……

ある夜、カンボーイ（警備兵）から「日本人通訳は横暴行為を行い、同士日本人まで犠牲にして、私利私欲に走り、公然と行動している事を皆さん知っているか。通訳はヒートリ（詐欺師）だ、皆さんはよく我慢しているね。」と日本語混じりで話された。我々も承知はしているも、通訳のことは我慢している。急遽我々アクチーフで協議し緊急総会を開き、先ず提案者のカンボーイから真相を聴取したが、論議百出。

吊るし上げに、同士七十人から一言ずつ指摘批判、その都度、身につけている物を脱ぐが、彼には不思議と普段所持が認められない腕時計、眼鏡、指輪、財布、刀類、シガレット（巻タバコ）、ライター等々は武装解除の折り、全部没収されたが、其の後入手した物品と聞き驚いた。指摘が続き全

裸になったが、逆立ちも何度も繰り返された。吊るし上げの後、慣例によって罰則の裁決、十一日間食事を半減、便所掃除十日間と従来にない重罪が全会一致で決し散会した。

数日後、いつの間にか、カンボーイにより、他に護送された。通訳不在で不便な点多かったが、一方思想教育も停滞、スパイ存在もなく雰囲気も明るくなった。

#### 休日（日曜祭日）の使役

平日は、学校校舎の建設ノルマで苛められるが、休日は、午前半日はラーゲリの使役、午後は個人の雑用。ある休日、私を含む使役三人が駆り出されて行くと、その家庭の主人は元特務機関のOBで、日本語が分かり、定年後でコルホーズの責任者。妻はマガジン（雑貨売店）作業員、子供三人の五人家族。一見、中流家庭と見受けられた。家屋の外には乳牛一頭、鶏五羽、周囲の畑に自家用野菜など自家用最小限の飼育作付で幸せな家庭であると見えた。

その家の作業はベチカ造り替え作業と聞き、早速作業に取り掛かる。

昼食間際になると、共稼ぎ夫婦は帰って来て、我々に、カーシャースープ（白米の牛乳スープ）を大きな洗面器ふうの食器に一人一杯と茹で馬鈴薯、黒パンを十分出され、久しぶりに満腹感を感じた。食後の休憩に、主人が来て、日本語交じりで「共産主義スターリン政権を見てどう思うか、レーニン・スターリンは我が勤労者の味方であり、尊敬すべき偉大な指導者である。日本に帰ったら社会主義ソ連を宣伝してほしい。ソ連国民は、当時、レーニン、スターリンを批判すると処刑される」とまで言われた。

続いて、主人は「ソ連は人間尊重の国家、働く者の国家、停年後はスターリンが生活の保証をしてくれる」と褒めるが、我々の現状は奴隷並みの衣食住に労働はノルマを強制されて、地獄環境と言い返したい気持ちを我慢して聞き入った。

今日のノルマは夕刻までに完成であるため仕事

に取り掛かる。予定どおり、夕刻までに一連の作業を終え、帰る準備、カンボーイは我々の労働を金子で受け取り、我々三人には「何か欲しい物は」と尋ねた。早速当面の必要なタバコ、マツチ、馬鈴薯、古新聞と言うと、直ぐ取り揃えてくれた。使役の収穫品は、ラーゲリに持ち帰って班内で分け合い、苦楽を分け合う習慣にしていた。

ソ連の夏は、夜遅くまで明るく、日中は猛暑であるが、日影、夜間は一段と涼しく、夕食後は外に出て星空を見る。北斗七星などは空気が清浄で夜空の星は格別美しく清廉な気持ちになるから、常に疲れた時は星空を眺めて疲れを癒し、清廉さを思うこと度々である。

ある日、珍しく学校作業の残業もなく帰る。

夕食後カンボーイが、今夜は学校建設に使う消石灰がハリリー駅に着いている。炊事班と連兵休を除く全員出勤準備するよう指示があった。待機しているトラックに分乗してハリリー駅に向う。

駅まで約一時間の道程。ホームに十両編成の貨車、



一両に六人で責任ノルマを夜明けまでに完了する作業指示。

日本では、石灰、セメントなど紙袋詰めで取扱いは容易であるが、当地は無包装で有蓋貨車内は電灯もなく、消石灰の粉塵が濛々として息苦しく、長時間続けることが困難で交代で実施する。衣類から顔、耳、鼻まで真白で三人交代で朝までに終り、早速帰所した。徹夜作業は翌日半日休息、早速衣類の埃を落とし、乏しい水で手顔を洗い、朝食の小豆で済ませ就寝した。

#### スパースク地区へ移動

昭和二十三年二月の朝、カンボーイが突然、ヤポンスキーダモイ（日本人、日本へ帰る）だ、防寒衣等全部返還して、直ぐ出発準備をせよ、との指示。もちろん学校校舎建設工事を途中で中断しての移動で不思議に思った。既に外では二台のトラックが待機、早速防寒具類を返還して分乗した。

防寒具返納して、夏服一枚で二月はまだ氷点下三〇度以下、体の芯まで凍り付く寒さの中、車上

では辛抱して肩を寄せ合って我慢した。

寒風に吹かれ二時間ほど走って、トラックが停車したところは、捕虜収容所ふうの鉄柵の前。先導していた軍のジープからソ連軍将校が誘導、私達に「日本船は米国の阻害で出港できないため、当分当地において待機」と言って立ち去った。

続いて、別の地からトラックにて下車した同士、見るからに以前シマノフスクにて一緒に草刈作業をして、ハロリーで別れた同士が七、八十人入って来た。同士達はハロリーで別れて伐採作業でノルマを強いられた。

狭いラーゲリに計百五十人詰め込まれたことは、長期滞在ではないと思った。

当地の作業は翌日からコルホーズ、煉瓦工場、石灰工場などの使役作業に毎日駆り出された。当作業は重労働作業で栄養失調の日本人では体力的に無理であった。

#### 思想教育再燃

ハロリー収容所にては、日本人通訳の進めでア

クチーフを編成して毎夜点呼後に講座を開設していたが、通訳追放後中断した。今度はソ連側の要請により復活した。

ソ連の軍隊将校中尉の指導で共産主義知識を学び、日本へ帰国して、日本国の革命を起す起爆剤にするよう力説した。

#### マンゾフカ地区へ移動

昭和二十三年十一月末、この日は一部の同志を残し、分遣隊として移動命令を受けた。「出発は明朝、食事を済ませて出発する準備せよ」と指示。

翌朝、ダワイ、ダワイ（早く、早く）と追い立てる。外には三台のトラックが待機、早速分乗出発した。トラックはシベリア鉄道に沿い走り続けた。約二時間ほど南下、兵舎ふうの建物が立ち並ぶ門前に停車、その門の前に大きく日本語で「革命三〇周年に当り共産主義政権をたたえる」大幕が掲げられていた。

下車して門内に入ると既に日本人抑留者が大勢いた。先着の同志よりナホトカの港まで約百五十

キロの位置で既に二、三百人が先着していると言われた。門前の大幕は帰国するための最後のたたえ文句であった。

先着の同志達は、あれから三年五カ月山奥で伐採、コルホーズ作業を強いられ、出来もしない「ラポータノルマで酷使され、疲れきった今回の移動は帰国のため集結地に来た」が、又もや嘘のようであると力を落して語った。

聞けば、どこも衣食住生活は同じようであった。作業においても、ダワイ、ダワイとノルマに追われ、長い長い三年五カ月でしたと語った。当地では、昭和二十四年の正月三日が過ぎてても、決まった作業はなく、時折り民家の使役に一部駆り出される程度でほとんどの残留者はラーゲリの清掃、炊事入浴の薪取り、水くみ使役を半日、午後は自由時間でほとんど思想教育でソ連軍将校の講義に費やしていた。

当地は帰国のための集結地で、約千人収容可能で最後の社会主義教育の仕上げの場になっている

とカンボーイから聞いた。

#### 思想教育続く

昭和二十四年の夏、各地から日本人抑留者の集結が日増しに増え、ソ連軍将校の講義、「日本の軍国資本主義の批判、レーニン社会主義を評価する討論会」が急増した。

更に帰国は、日本共産党に入党した者から日本に送還するなど脅迫するようになった。

マンゾフカに来て、我々の生活環境も一変した。作業より思想教育に重点をおき、復員後、ソ連国に好感を持たせる思想教育に急激に変化した。

十月十六日の朝、突然次に呼ぶ者は、ダモイの準備をせよと、名前はスパースクから来た同志の名前全員であった。一斉に歓声を上げ、誰も、四年余騙され騙され何度も耐え忍んで今日を迎え、今度こそ間違いがないと初めて信じ、喜びがいつまでも続いた。

所持品は、食器(飯盒、水筒、缶詰の空缶のみ)、筆記具(紙類)など一切ソ連用品は持ち出しを禁

止され、余分は没収され、トラック八台に分乗して当地を出発した。

トラックは、寒風の中、シベリア鉄道に沿って沿海州地方を南下、三時間ほど過ぎた所、風に乗って吹き込む潮風に、誰となく「潮風だ、日本海の潮風だ、今度は絶対間違いがない」と車上で騒いだ。誰となく、それでもソ連のことだ、日本船に乗るまでは安心は無用だ、頑張ろうと戒めあった。

車上でカンボーイが突然「ヤポンスキー、ナホトカ(日本人、ナホトカ港)が見えるといった。一斉に誰となく、そうだ日本海だ、日本の日の丸船だと興奮し、一斉に歓声が続く。カンボーイの指示に従い、下車して腰に空缶(食器)をぶら下げ、足取りも軽く、指定の収容所に向う。収容所に先着隊の同士が歓声を上げ歓迎してくれた。

到着と同時に昼食を済ませ、ソ連女医の健康診断に続いて、所持品の検査。

ナホトカ港では、ラポーター、ノルマ、ダワイ

の言葉もなく、夜は大広間に一枚の毛布の転寝で一夜を明かす。

十月二十四日、二回目の消毒を受け、衣類、編上靴、靴下、外套など全部満州の軍隊の中古品を支給。情報では、明日乗船と聞き、四年三カ月待ちに待った帰国がここに実現と聞き、半信半疑、ソ連のこといつまでも疑心を持った。

十月二十五日眠れなかった一夜が明け、ソ連での最後の朝食を済ませ、徒歩でナホトカ港に向う。岸壁に停泊していた栄豊丸に日本語が記され、甲板上に久しぶりに見る日章旗が一際美しく、懐かしく、一瞬感動した。約千人乗船、しばらくして、大きな勇ましい警笛を残し出港した。

出港後、アクチーフより日本共産党仮入党の受付を開始するも、雰囲気は一転逸脱、無言に静まり、誰一人申し出はなかった。

船はいつの間にか沖に出て、日本海の荒波に甲板まで高波を受け、船酔いが続出の中、本部よりアクチーフ員の召集アンウンス。用件は、日本へ

上陸するまでに日本共産党仮入党を済ませるようにとの指示であった。

船は見渡す限り水平線、日本海を航海中で船酔いが続出、ほとんど寝込んで日本共産党に仮入党の勧誘のできる状態でなかった。

十月二十七夕刻、甲板に出ていた同士から、オーイ島が見えるぞ……と呼んで船内に入ってきた。その発言で船酔いの同士まで飛び起き甲板にて歓声を上げた。

太陽は西に傾き日没前、青海に浮かぶ陸地がほのかに見えた。この風景を目撃すると、一斉に酔いも覚め、万歳、万歳の歓声に包まれた。捕虜生活から一変し、船上は一気に元気が沸きあがった。

船は、刻一刻と陸地に近づくと、ソ連では見られない緑の竹藪、瓦屋根、遠くの山々は箱庭の景観で、一段と懐かしさを増し、感無量、感激一色であった。

目を離さず、大望の大望であった瞬間のとき、船は湾に入ると、「舞鶴だ、若狭湾だ……」と一

齊に叫ぶ。四年三カ月騙され騙されて来たが、今度こそ本当、半信半疑であった。

私は、軍隊生活二年、抑留生活四年三カ月、この六年三カ月前は、日本は戦争一色、東京を始め、大都市などは連日連夜、米空軍のB29爆撃機により爆撃を受けていた。国民一丸となつての戦争であつたが、今では舞鶴港は静穏を取り戻し、空には我々の帰国歓迎の日の丸国旗が記されたヘリコプターが舞い、感激と感動に沸いた。

栄豊丸が静かに接岸。地元代表者より、「長い間にわたりご苦労様」と簡単に歓迎挨拶を受けた。しばらくすると、船内アナウンスで上陸指示、岸壁に皆さんの家族等が小旗を振って迎えている。安心感を与えるため四列縦隊に並び、整然と元氣に行軍せよ。と放送された。

十月二十七日、晴天の夕日、多くの家族の歓迎を受け、やっと大望の日本大地に第一歩を踏み入れ、本当に日本に帰れたと実感と感激、感動が沸いた。

舞鶴収容所入口で、一斉に被服の上から消毒をされ、続いて医師により健康診断、検便と慌しく、久しぶりに風呂で足を伸ばせ、ノルマ、ダワイもない社会でのんびり出来るのも四年三カ月ぶりである。

夕食は日本軍隊のアルミ食器で懐かしい白米御飯を腹いっぱい食べ、ソ連の高梁食とは大差であつた。夜は五枚の毛布に暖かく就寝することができた。

翌朝、六時起床点呼後、今後の日程についてアナウンスで説明。二十八日、二十九日の二日間に理髪、衣類洗濯、入浴を済ませ、三十日の朝、家族などの迎えのある者は、家族に引き渡すから準備するよう放送された。

二十八日の午前中にアナウンスにより日本共産党仮入党を再度請求、午後には再度のアナウンスで家族の迎え者名簿が発表された。全員、耳を傾け聞き入ったところ、私は早めに呼ばれ、先ず一安心した。

呼ばれなかった者、千人中数百人と以外に多かった。呼ばれない者は、当收容所にて待機と言われたが、今まで同じ環境の同士が、ここに大きく二分され、心境も一気に異なつて、放心、茫然とする有様であつた。

祖国に帰つたと言うに、收容所周囲には警察官が嚴重な警備体勢。空には收容所上空に絶えずヘリコプターが巡回警備、ソ連国内以上の警備で、一歩も外に出ることができない体勢と見受けた。

今までは、警備、監視されることに抵抗はなかつたが、我々は祖国のために召集され、長期間苦勞に堪え、やつと大望が叶い帰国した。我々は国の犠牲者であり、叙勲者であると信じて今日まで酷使に堪え忍び、帰つてみれば犯罪者扱いか、全く考えが及ばなかつた。これを知つてからは、名前を呼ばれなかつた同士には失望する者、逆上する者に分かれ、今後に不安を持つていた。

十月三十日、各班ごとに点呼を終え、帰国手続き並びに旅費（一人二千元）を受け取り待機した。

午後一時より順次、引渡すアナウンスが流れた。最後の昼食を早めに済ませ、柱大時計が一時と同時アナウンスによつてアイウエオ順に名前が呼ばれた。

門外で大勢の迎え家族が我々を待ち受けている姿を目前にして、嚴重な警戒のなか、一人一人家族等に引渡される。一時間余り過ぎ、ようやく私と呼ばれ衛門に行くと、六年三カ月ぶりに実兄と面接、兄が笑顔で私に接近「長かつたな。体は大丈夫か。」と尋ねてくれた。

感無量、感激でいっぱい。「うん体は大丈夫だ。」興奮のあまり、次の言葉が出ない。

昭和十八年八月三日召集以来、六年三カ月拘束からやつと解放され。長い外套、特大の編上げ靴を引きずりながら無言で舞鶴駅に向つた。何から話していいか戸惑い、先ず家族の安否から尋ねた。收容所を出て以来、付きまとう二人の男性に気付き、兄に聞くと最近ソ連よりの復員者には当分、私服警官、刑事が思想について警戒しているから

注意した方が良いと聞かされた。

日本共産党に仮入党をしなくて正解であったと思つた。なるほど、日本国は共産党に脅えての行為か、刑事は東海道線に乗車するも、二人の男はすぐ後に坐り耳を済ませていた。

しばらくすると、尾張一宮に着き、下車した。ホームは屋根もなく、周囲を眺めると戦災で焼野原の中、復興で点々と仮住宅、仮店舗がバラックで建てられ、その遠方に真清田神社の森が一望できた。駅舎もバラックの仮駅舎、敗戦の痛ましさを感した。

電灯もない暗いホームには、地元代表として千秋村長を始め数人の歓迎を受け、駅舎前に岩田ふとん店と記されたオート三輪が待機し、その荷台に全員乗り合わせ帰宅した。

故郷の八幡神社には、集落の人数百人の歓迎を受け、帰国報告謝辞を述べ帰宅した。

終りに

敗戦から六十余年、ある悪夢のような時代を知

つた世代が少なくなつた。戦争はいかに愚かで悲惨なことか、今なお世界各地で発生している紛争行為などが止み、一日も早く真の平和が到来することを念願してやみません。なお、書中には古いことで、日時、数字、場所などにおいての誤記については、ご容赦のほどお願いします。

#### 【執筆者の紹介】

生年月日 大正十一年十一月十八日

住 所 愛知県一宮市千秋町宇佐野

最終学歴 昭和十二年三月二十四日 尋常高等小

学高等科卒業

経 歴 昭和十四年六月一日 愛知県丹波郡農

会就職

昭和十八年八月二日 退職

軍 歴 昭和十八年八月十日 満州第二六三四

部隊入隊

終戦時階級 歩兵 陸軍上等兵

終戦場所 牡丹江

復員後の経歴

昭和二十四年十月三十日 舞鶴上陸復員  
昭和二十四年十一月十四日 愛知県丹羽郡千秋  
町役場入職

昭和三十年一宮市と合併

昭和五十四年四月一日 一宮市役所退職

昭和五十八年四月二十日 一宮市市議会議員当

選五期二十年間

平成七年五月十三日 一宮市市議会議長就任一  
カ年

平成七年五月二十五日 天皇陛下園遊会招待

平成八年四月十日 橋本総理大臣観桜会招待

平成十年十一月四日 宮田用水土地改良区理事  
長

平成十六年八月二十三日 濃尾用水協議会会長

平成十七年四月二十七日 旭日双光章受章

(愛知県 河村 廣康)

全員元気で日本へ帰ろう

愛知県 岡田 康孝

二十一歳で現役入隊

現役二十一歳で豊橋の部隊に入隊。

四カ月あまり、恵那山の山麓で初年兵教育を受けて、昭和十六（一九四一）年八月、現在の武漢、昔の漢口の北方六十キロメートルの片田舎で駐屯しておりました。なんにもない田舎ですが皆さんご承知のとおり、長沙作戦がありました。第一次、第二次長沙作戦です。その当時の新聞を眺めてみると、「城壁で日章旗を振って堂々と入城」こういう報道がされていきました。しかし、生還したものは半数であります。散々な目に遭って敗退して帰ってきております。これが現実であります。当然、長沙、桂林は、私にとって痛恨の地であります。

大腿部に銃弾